

龍神の生贄
虐げられた無能少女は
あやかしの当主に愛される

高瀬船 Fune Takase



アルファポリス文庫

一章 名無しと呼ばれる少女

「やだ、なんで名無しがいるのかしら……早く視界から消えて欲しいわね」
くすくすと嘲笑う声が聞こえる。

まるで誰かに聞かせるかのような、そんな心ない言葉。
名無しと呼ばれる少女は、ただ身を固くして俯き、その場から動かずじっと耐えていた。

「本当に。この里で生まれたとは思えないほど、何の力もないわよねえ」

「ええ、ええ、本当ですわね。朱音様は素晴らしいお力を持っているというのに。どうしてあんな力のない物が、この里から生まれてしまったのでしょうか」

「我がかくりよの里の恥さらしだわ」

朱音と呼ばれる女性の周りには数人の女性がいる。

皆、逃げるように走り去った少女を嘲るように見つめていた。

「——ふふ。やめなさい、あなた達。名無しも好きでそう生まれた訳ではないのよ。」

たしかに我が里で何の力も持たない名無しは里の恥……。けれど、この里で生まれたからには同じ里の仲間なのですからね」

鈴の音のような可憐な声の主が告げる。

声を発したのは周囲から「朱音様」と呼ばれていた女性。彼女らは「流石です」やら「慈悲深いです」やらと、口々に朱音を誉めそやした。

「……はあつ、はつ」

細かく息を吐き出し、駆ける足を前後に動かしながら名無しと呼ばれた少女は唇を噛み締めた。

逃げる直前、名無しの少女は朱音の表情が見えた。

他者を嘲り、愚弄し、醜く歪んだ顔。

そして、愚弄した相手が傷付いたことに気づき、その表情は悦びと愉悦に満ちていた。

「……っ」

名無しの少女は、悔しさや恥ずかしさとともに、「なんで私だけ」というほんの少しの憤りを奥歯を噛み締め何とか耐える。

そして、そのまま自分に与えられた家にひた走る。

背後からは女性達の笑い声が聞こえてきて、名無しの少女はもつれそうになる足を必死に動かし続けた。



「ただいま……」

カラカラと粗末な引戸を開けて自分の家に入る。

家と呼ぶには雨風を凌げる程度の粗末な作りである。

これならば、家畜小屋の方がまだ豪華かもしれない。

体当たりするだけで壁など簡単に崩れてしまいそうな家に入り、少女はほんと胸を撫で下ろした。

少女が「緋色^{ひいろ}」という自分の名で呼ばれなくなったのは七歳の時。それから十六年の年まで九年間、実の親にも名を呼ばれていない。

それどころか七歳以降、両親と顔を合わせて話したことも、片手で数えるくらいしかなかった。

緋色の衣食住の面倒をみていた祖母も、同じようなものだった。名前を呼ばないだ

けでなく接することすら避けていた。

そんな祖母が五年前に亡くなり、住んでいた家から追い出されたあと、里外れにあるこの小屋に住まうことを強制された。

それ以降、人と話すことも誰かと交流する機会もほとんどなくなっていた。

まるで緋色を存在しない人間のように扱うこの里。

まるで物のように扱う両親。

けれど、それは仕方のないことだと緋色も分かっている。

この「かくりよの里」は、特別な力を持つ人間の里だから。

「霊力」と呼ばれる不思議な力は生まれながらに授かるもの。成長と共に霊力が育ち、身体に定着する。

緋色は強い霊力を持つ両親から生まれたにもかかわらず、霊力をその身に宿さなかった。

里では霊力を持たない人間を「名無し」と呼び、侮蔑の対象としている。

「普通なら七歳になる頃には霊力が現れるはずなのに……今になっても何の力も感じない……」

緋色は無意識に自分の両手を見下ろす。

年の割に小柄な緋色の身体はひよろりとしていて弱々しく、その分手も小さい。

十分な栄養をとれていないのだから、成長が悪くとも仕方ない。

緋色は溜息を吐き、夕食の準備のため台所に立った。



——かくりよの里。

外国に門戸を開き、文明開化が進んだ現在。そんな時代になったというのに未だに異国の文化を受け入れず、昔から続く里の風習を守る、良く言えば古風。悪く言えば時代遅れとも揶揄される里だ。

それは、かくりよの里が帝都・東京から遠く離れた地にあることも、少なからず影響しているのかもしれない。

里の掟は、絶対。

里長の決定は、絶対。

里の風習を破り、逆らう者は誰一人として許さぬ。

外界との交流を断絶し、外の情報を得ることが叶わない狭い世界。

そんな状況の里では、「霊力がない」というだけで人を人間として扱わず、里の住民たちはその人間を平気で陥れ、侮辱する。

この里で生まれて他の地を知らずに育った者は、それが普通で当たり前なのだ。だからどれだけ苦しく、辛い毎日を過ごしていても、緋色はこの里から逃げ出そうと考えたことは一度もない。

だから、怒りを覚えたり反発したりといった行動を起こすこともなかった。

「——あ。お米がなくなってしまったのね……」

米櫃を開けて中を確認した緋色は、落胆の声を漏らす。

山菜や茸は採って来たが、米がなければ今後の生活にも支障をきたす。

「交換できる物は……駄目ね、何もないわ。明日捕りに行かなきゃ……」

朝早く山に入って子うさぎでも数匹捕まえば、幾分かの米と交換して貰えるだろうと緋色は考える。

今夜の食事は米を諦め、山菜と茸だけを調理して汁物にすることに決めた。

僅かでも、腹に入れば何でも良い。

普段の食糧は、緋色が山で山菜や小動物を捕まえ、里の店に持って行って欲している物と交換してもらう。里に唯一の店では小間物屋から食料まで、生活に必要なものは何でも揃えることができる。

緋色が店先に姿を現すと、店主はあからさまに嫌な顔をする。だから緋色は、店の脇に交換品を置いておく。

それから数時間後に戻ると、依頼していた物が用意されているのだ。

たとえ緋色が「名無し」でも、店は交換するに値する物を持って来た客の対応をしなければならぬ。

略奪や拷問のようなことをして、名無しを死なせてしまえば、それはそれで罪となる。

迷信めいたものではあるが、自ら手を汚し人を殺めると、その身は穢れ、靈力を失うと言われている。

里の人間は「靈力を失う」という迷信の方をたいそう信じ込み、常に靈力を失わぬよう行動している。

人を「名無し」と呼んで人として扱わないのに、この里の掟はどこか矛盾しているのだが、その矛盾に里の者は誰も気づかない。

幼い頃からそう教えられてきた里の住人達は、疑問すら抱かないのだ。

ふうと緋色は溜息を一つ零して手早く夕食を作り終え、翌日に備えて食事ともいえる食事を数口で終わらせてさっさと布団に入った。



そうして、迎えた翌日。

緋色は昨晚考えた通りに朝早くから山に入り、子うさぎを数匹捕まえた。不思議なことだが、昔から緋色が山に入るといつも都合良く弱った動物と出くわす。そのため、体力もなくいまにも折れてしまいそうな華奢な腕でも簡単に動物を捕らえることができるのだ。

緋色は捕まえた子うさぎ数匹を前に両手を合わせ、目を瞑る。

（山の恵に感謝いたします……）

ぱちりと目を開けて山を下り始めた緋色は数時間かけてゆつくりと下り、もうすぐ麓というところで、緋色の耳に人の話し声が聞こえてきた。

（いけない、隠れなくちゃ……）

急いで声とは反対方向に向かい、大きな木の根元にしゃがみこむ。

風の向きにより、話し声ははっきりと緋色の耳に届いてきた。

「そういえば、今度の里祭りには珍しい家の方々がやって来るみたいだぞ」

「本当に？　じゃあきつと年頃の娘を持つ家は大変なことになるわね——」

緋色は「里祭り」の言葉を聞き、前回の里祭りからはやくも五年がたったことに気づいた。

里祭りとは、このかくりよの里で五年おきに開催される大きなお祭り。

この里祭りがおこなわれる期間だけは、かくりよの里に里以外の人間が立ち入ることが許可される。

前回の里祭りの時にはすでに祖母は亡くなっていて、緋色の両親が嫌そうにやって来た。

数年ぶりに顔を合わせたものの、両親は緋色を一瞥した後、ただ冷たく「一歩も家から出るな」と言っただけだった。

逆らうことなど、緋色にできるはずがない。

だから緋色は前回の里祭りの時は、家から一歩も外に出なかった。

「じゃあ、今回も家から出ないようにしなくちゃ……」

話し声が遠ざかり、近くに人の気配がなくなったことを確認した緋色は呟いた。その後急いで立ち上がる。

物々交換をしてくれる店に向かうため、緋色は再び歩き出した。

二章 かくりよの里の、里祭り

里祭り当日。

緋色はしばらく家に籠っていられるように、長期保存ができる食べ物を用意し、外に出なければならぬ用事を全て済ませていた。

今回は両親からは何も声をかけられなかった。

(……もう、名無しの私のことなんて忘れてしまっているかもしれないわね)

自嘲混じりに乾いた笑みを零し、緋色はすと鼻を鳴らす。

里祭りは七日間、秋から冬に移り変わる季節におこなわれる。

その間、一歩も外に出ないようにしなければならぬ。この里では親の言いつけは絶対だから。

里の外れにある緋色の家は周囲に他の家屋がなく、店もないため里の人間以外はそう来ないだろう。

今日は朝から里が騒がしく、どこか浮き足立っている。

「そっか……、もう人がやって来ているのね」

引き戸を薄く開けて外を見る。

緋色の家から祭りの様子は見えないが、里のいたる所に施された祭りの飾りだけは目に映った。

しゃん、しゃんと、楽器か……鈴か何かの音が一定間隔で聞こえてきて、緋色はどうもその音を聞きながら外の景色を眺める。

祭りの雰囲気を楽しむことも、参加することもできないという現実が緋色の目の前にある。

手を伸ばせば容易に掴めるのに。

足を踏み出せば簡単にその世界に参加できるのに。

だが、玄関には見えない境界線がある。

——名無しは、里の一員ではない。

「……………」

緋色は音や景色から目を背けるように、薄く開けていた引き戸をぴっちり閉めた。



「……………」

「籐原様？ どうなさいました。そちらには何もございませんよ」

とある方向を見据えたまま、足を止める男。

その男に向かつてこの里の長である男が、不思議そうに話しかけた。

「籐原様、あちらには山の入口しかございません。さあ、こちらに。この里一番の霊力を持つ門真朱音が舞を披露いたします」

里長に急かされ、籐原と呼ばれた男は「何でもない」と答え、名残惜しそうに視線を外す。

里長の案内に従い少し進むと絢爛な舞台が現れ、その上には数人の女性が扇子で顔を隠して座していた。

男が舞台の前に移動した時。

——ちゃん。

と、澄んだ鈴の音が響き扇子で顔を隠していた女性達がゆっくり舞台の上で舞い始める。

神楽舞とは違う。

この里に遥か昔から伝わる舞の一つだ。

「たしかに、霊力はなかなかようだ……」

男は里長の隣で呟く。

里で一番の霊力を持つと紹介した里長は、「霊力はなかなか」と評価する男の言葉を聞いて不愉快そうに片眉を上げた。

「——恥ずかしながら、籐原様に比べれば、かなう人間などおりますまい」

(籐原家当主とはいえ、若造が生意気な口を)

里長はおくびにも出さず、心の中で悪態をつく。

里一番の霊力を持つ朱音を紹介したというのに、籐原は興味を示さず、ぴくりとも表情を動かさない。

丁度その時。舞が終わった女性達は朱音を筆頭に扇子を外し、舞台から降りてきた。

「——籐原様。ようこそ我がかくりよの里へ。朱音と申します。どうぞよしなに」

どこか含みのある朱音の言葉を聞き、籐原は不快感を顕わに眉を顰めた。

だが、籐原のその態度を見ても里長と朱音は気にもとめずに話を続ける。

「朱音は強い霊力を宿しておりますので、籐原様のお仕事にも人一倍お役に立てましょう」

「おまかせくださいませ」

「——今、里に着いたばかりだ。まだ何も決めていない」

「ふふ、どうぞ心ゆくまでご確認ください」

籐原の隣に立った朱音は腕に触れようとしたが、朱音の行動を察した籐原はするり

と身を翻し逃れる。

くすくすと後ろから聞こえる媚びた女の笑い声が籐原の耳に障った。彼は眉を顰めつつ、先程から山の入口の方向にばかり視線を向けている。

（あの向こうに何も無い、なんて嘘だろう。膨大な霊力をこんなにも感じるのに）
籐原はどうやってこの里の者達を振り切り、山に向かおうかと思考を巡らせた。

普段、里以外の人間はかくりよの里に立ち入ることはできない。
だが里祭りの期間中だけは開放される。

籐原は、昔から外界と交流を断ち強い霊力を宿す人達だけの里があるのは知っていた。かくりよの里は、籐原のような人間の間ではとても有名だ。

強大な霊力を持つ者ばかりの里だと伝え聞いていたため、五年ぶりに里祭りがおこなわれる今年、籐原はどこか期待していたのだ。

自分の身に流れる「血」に耐えうる人間がいるかもしれない、と。それなのに先程里一番の霊力を持つと紹介された朱音に会って籐原は失望した。

（——里一番の霊力を持つ女だと言われたが、それ以上の霊力をあの山の方向から感じるの、一体どういうことだ？ 人なのか、それとも魔力を発する物でもあるのか）

籐原は膨大な霊力を感じる方向に無意識に視線を向ける。それは、緋色が住む家の方角であった。

籐原と里長、そして朱音の三人は、祭りの期間中に籐原が滞在する邸までの道を歩いていた。

里祭りという名の通り、祭囃子の音が聞こえ、人の往来も多い。

里の者は里長と朱音が直接案内をしている籐原に注目し、そこから「あれが噂の」や「籐原の当主か」などと噂話をしているのが聞こえてくる。

籐原の隣を歩く朱音はどこか誇らしげな笑みを浮かべ、里の女性達から羨望の眼差しを注がれている。

「籐原様。本日はこちらにお泊まりのご用意をしております。夜には宴会もございます。帝都でのご活躍などお聞かせください」

「それまでの時間は自由に里を歩いても良いか？」

「はい。ご自由にお過ごしください。案内には朱音を付けましょう」

里長の言葉に朱音が美しい笑みを浮かべ、胸元に手を当て軽く腰を折る。

だが、籐原はその申し出を断った。

「——いや、案内は結構だ。家から連れてきた者達と回る」

すげなく申し出を断られ、朱音は一瞬だけむっとしたがすぐにそれを隠し、再び美しく微笑む。

あまりしつこく言いすぎると悪印象を抱かれると警戒しているのだろう。

里長は感情の読めない瞳で藤原を見つめ、こくりと頷いた。

「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

「ああ。案内、感謝する」

里長と朱音が頭を下げ、引き返して行くのを見届けた藤原は、案内された邸を振り返った。

軽く溜息を吐き出し、とりあえず夜の宴までの時間、里をぶらりと見て回るかと考えた藤原は、軽装に着替えるために一度邸に向かった。



里祭りの当日、夕方。

緋色は朝から家の中で過ごし、食事を終えて片付けも済ませてしまった。

「普段は、この時間はまだ山に入っている時間だけ……」

外出を禁じられているために山に入ることができない緋色は、ほつれてしまってい

る自分の着物を縫っていた。

冬がもうすぐやってくる。日が沈むのも早い。

薄っすらと暗くなり始めた外の景色を窓の隙間から見たとき、緋色はふと違和感を覚えて手を止めた。

「え、人……?」

見間違いだろうか。

里の者は緋色の家に近寄らない。

けれど、今は里祭りの期間だ。

緋色のことを知らない外の人は多いから、足を伸ばして里の外れまでやって来てしまいうこともあるのかもしれない。

万一人が来ていたとしても、傍目から見れば人が住んでいるとは思われないだろう。緋色は少しだけ不安を覚え、息を殺すようにして窓の隙間から外を見つめる。

家の中が見えないよう、窓には目張りがしてある。外にいる人からは緋色の姿など見えないだろう。

ましてや、こんなぼろぼろの小屋に人が住んでいるとは思わないはず。

不安は残るが、もし里以外からやって来た人であればどうかとはらはらしながら窓の隙間から見える外の様子を凝視していると、その人影は少しずつ近づいてき

ているようだった。

「や、やっぱり見間違いないじゃない……っ」

誰かがやって来ているということに、緋色の顔色が悪くなる。

どうしようかと慌てているとまだ大分距離があるというのに、その人影の人物とばかりと目が合ってしまったような感覚に陥る。

「……っ!？」

ギクリと緋色の体が強張る。この隙間から目が合うことなどあり得ない。

だが、近づいていた人影も緋色と同じタイミングで驚き、身動きしたように見えた。

緋色は思わず「えっ」と声を漏らす。

嘖然としていると、その人物の顔がはつきりと見えるほど家に近づいてきたのが分かる。

真っ直ぐ緋色の家に向かってきているようで、その足取りに迷いはない。

「……!」

急いで隠れなくては、と緋色が振り返ろうとした瞬間。

薄っすらと日が暮れ始めていたのだが、近づいてきていた人の姿がなぜか緋色にははつきりと見えた。

「——なんて、綺麗な……」

周囲は薄暗くなってきたのに、その人の瞳はまるで空のように青く輝き、夜明け前の空の色のような濃紺の髪の毛がざらりと揺れた。

どこか、畏敬の念にも似た感情が込み上げてきて、緋色は握っていた縫いかけの着物をぼとりと床に落としてしまった。

その瞬間——

「——藤原様！ お待ちください、藤原様！ そちらには何もございませんわ！ 皆がお待ちですので、お迎えに上がりました！」

人影の向こうから慌てて走り寄る姿が見えて、緋色小さく「あ」と声を漏らす。

人影は藤原というらしい。

呼びにきたのは朱音だ。

「朱音様が呼びに来られるってことは……とても偉い方なのかしら……」

やはり、里以外の人が迷い込んでしまったのだろう。

緋色がそう考えていると、藤原を呼び戻しにやって来た朱音が一瞬、緋色の家に鋭い視線を向けた。

まるで緋色が窓の隙間から見ていることが分かっているかのように、強く鋭い視線を向けて睨み付ける。

すぐに朱音はぶいっと顔を背けて藤原の背を押し、里の中心部に戻るよう促す。

朱音に睨まれた緋色はびくりと体を震わせたが、朱音はそんなことに気づくはずもなく簾原を連れて戻って行く。

家から遠ざかって行く二人の後ろ姿を見つめた後、緋色は落としてしまった着物を慌てて拾い、窓際から離れた。

朱音の目を思い出してぶると震える。

「……どうして、あんなに怖い顔をされたのかしら」

外出などしないのにと、緋色は溜息を吐き出す。

「お言いつけを破るつもりなんて、ないのに……」

そんなに信用されていないのかと些か悲しくなりながら、緋色は溜息を零しつつ家事を再開する。そのうちすっきり、簾原と呼ばれた人のことなど忘れてしまった。



時間は過ぎ、夜。

外から聞こえていた祭り囃子も人々のざわめきも消え、多くの人が邸や建物内に入った時間帯。

日付が変わる前後、今のこの時間帯は「妖怪」と呼ばれる存在や「魔物」、そして妖怪や魔物よりも厄介な存在である「妖魔」と呼ばれるモノが活発に動き出す。

かくりよの里は強い結界が張り巡らされており、妖怪や魔物は侵入できない。

かくりよの里の外にひとたび出てしまえば、そこは結界の恩恵を受けぬ危険な場所である。

緋色の住む家の近くから入る山の奥は一部が結界の外になる。

だがとても貴重な「妖石」と呼ばれる、霊力を高める石が採掘できる場所のため、かくりよの里の者は何人かで班を組み、度々その結界の外に採掘しに向かうことがある。

妖石は珍しい石で、この石を求めてかくりよの里以外からも採掘にやって来る人がいると、緋色は昔祖母に聞いていた。

かくりよの里に住む者のように強い霊力を持たない人々は、その妖石から霊力を得て妖怪を倒したり、追いつたりする。

或いは報酬として妖石を求める。帝都の守護職に妖怪や魔物の討伐を依頼し、その報酬として妖石を渡すという。

人が寝静まる深夜。

妖怪や魔物が力を発揮する宵闇の時間。

緋色もそろそろ布団に入ろうと、寝支度を始めていた。

しんと静まり返る中、家の外から小石を踏む音が聞こえた。

「こんな時間に、誰……？」

緋色が住む家にこんな時間にわざわざやって来る里の人間などいやしない。

そうすると、里以外の人間か。

緋色はその考えに至り、急いで台所に行って鉄鍋を抱える。

霊力のない緋色は、危害を加えようとする人間から身を守る術がない。

物理的な攻撃手段しか持たない緋色は、相手が霊力など持たないただの人間でありますようにと祈りながら息を殺し、耳を澄ませる。

小石を踏む足音は確実に緋色の家に近づいてきている。

「……………」

鼓動が緊張によって早まり、緋色は握り締めていた鉄鍋の取っ手をぎゅうと握った。その時。

「——名無し、起きているかしら？」

家の外から聞こえてきたのは聞き覚えのある女性の声だった。

緋色はほっとして、緊張で固まっていた体から力を抜く。

「朱音さま？」

夕方、籐原を迎えに来た朱音の声。緋色は驚きつつ言葉を返す。

「ええ、そうよ。私。起きていたのね、よかったわ」

「このような時間にどうなさったのでしょうか……」

緋色は慌てて鉄鍋を台所に戻し、玄關の扉を開ける。

月明かりの下、持ち運びできる小型の行燈を手にした門真朱音がたしかに緋色の目の前にいる。

朱音がこんな時間に一人で？ と緋色は朱音の背後を確認するが、朱音の後ろには誰もおらず、正真正銘朱音ただ一人だ。

朱音は行燈を持っていない方の手を自分の頬に添えると、困ったように眉を下げて口を開いた。

「実は少し困ったことが。今、かくりよの里では里祭りが開催されているでしょう？ 名無しは知らないと思うけれど……里祭りではかくりよの里に伝わる神招舞を舞うの」

「神招舞……」

「ええ。里一番の霊力を持つ女性——私が舞うのだけど、その舞の時に必要な道具を保管庫から取り出し忘れてしまったのよ。この後、私はとても身分の高いお方と共

に宴会に出なくちゃなくて……」

そこで朱音は一旦言葉を切り、ちらりと緋色に視線を向ける。

「山の奥の、結界の手前にある保管庫からそれを取って来てもらえないかしら？ 結界内だし、妖怪や魔物の危険はないわ。……名無し、貴女里祭りなのに外に出られないでしょう？ 気分転換にもなるし、お願いしたいの」

朱音は「お願いしたい」と言うが、緋色に断る権限などない。お願いと言う名の、命令のようなもの。

「で、ですが……本当に家から出ても大丈夫なのでしょうか……もし里長に知られてしまったら……」

力のある朱音の依頼だ。万が一にも断り、それが里中に知られてしまえば、緋色はどうな咎めを受けることになるか。

外に出て咎められないだろうかと緋色が不安げにしていると、朱音は「大丈夫よ」と微笑んだ。

「里長には報告してあるわ。この時間なら里以外の人も外を歩かないだろうし、まして山でしょう？ 夜の山に進んで入る人はいないわ。もしかしたら私の友人たちも手を貸してくれるかもしれないから、山で会ったら合流してくれば良いわ」

「そういう、ことでしたら……分かりました。保管庫のどの辺りにございますか？」

「ありがとう、名無し。置かれているのは——」

緋色の言葉に朱音は嬉しそうに笑うと、道具がどんな見た目で、どこにあるのかを緋色に説明し、「じゃあ頼んだわね」と緋色の家を後にした。

緋色は朱音が帰って行く姿を見送ってから、山に入るための支度をはじめ。

普段着ている着物に着替え終えた緋色は、蠟燭一本を手を持ち、麻袋を帯に挟んで山に入った。

「夜の山は、さすがに不気味ね……」

結界のお陰で妖怪や魔物に襲われる心配がないとはいえ、野生動物はいるのだ。

猪や熊と鉢合わせてしまえば、命の危険がある。

風が木々の葉を揺らす音と、緋色の足音だけしか聞こえず、しんと静まり返っている山の中はどこか別世界のようなのだ。

緋色はできるだけ急いで目的の保管庫に向かう。

山に入ってからどれくらい時間が経っただろうか。

息も上がり、汗をかきはじめた頃に緋色が目指していた保管庫が目の前に現れた。

「——！ よかった、あったわ……！」

中に入り、保管庫から朱音に言われた物を取ってすぐに戻ろう、と緋色が安堵した

時だった。

保管庫に続く細い小道に緋色が足を踏み入れた瞬間……

リンッと澄んだ鈴の音が聞こえた。

次いで、足元の小道が突然崩れて緋色の体が傾いた。

「——あっ」

雨も降っていないのに、なぜ……

そう思う間もなく、緋色はガラガラと崩れ落下していく土砂と共に、小高い崖から転げ落ちてしまった。

「——うっ」

崩れる土砂に巻き込まれ、緋色は悲鳴を上げる間もなく落ちていく。

身体中を石や岩に擦り、時折叩き付けられた衝撃で、緋色は意識を失ってしまった。

どれくらいの時間が経過しただろうか。

寒さにぶるりと体を震わせ、緋色は目を覚ました。

「——あ……、私……」

ゆるりと頭を振り、ゆっくり体を起こす。

土砂崩れに巻き込まれ、滑落した緋色の体は岩に打ち付けられ、石に身体中が擦れ

てしまったというのに、骨折どころか、出血すらしていない。

大怪我をしていてもおかしくない状況。緋色は不思議に思いながら、その場で立ち上がる。

「足も、折れてないわね……どうして……?」

緋色は真っ暗闇の中、じっと静かに息を潜める。

ようやく目が慣れてきて、辺りが薄っすらと見える。

「土砂崩れに巻き込まれたのに……なんで私はここに……?」

土砂は緋色が倒れていた場所の更に下まで落ちており、緋色が今いる少しだけ出っ張った場には、僅かな土や小さな岩などが転がっているだけ。

落ちていく時に、この場所に運良く投げ出されたのだろうかと考える。

とりあえず保管庫のある場所に戻らなければと、緋色は頭上を見上げた。

「ここからじゃ……さすがに登れない……迂回して、山道に戻らなきゃ……。あ、でも! もしかしたら朱音様のご友人が保管庫までやって来るかもしれないわ。この場所を動かない方がいいかしら……」

朱音が言っていたことを思い出し、緋色はその場を動かない方がいいのか、それともこの場を動いて里に戻る方がいいのか悩んでいた。

運良くこの場所に留まったのはいいものの、土砂崩れが起きた理由も不明だ。ここ

最近は雨も降らず、地盤が緩んでいたとは考えにくい。
「原因が分からないから無暗に動かない方がいいかな……朱音様のご友人もいらっしやるかもしれないし……」

緋色は動かないことを決めたものの、周りには寒さをしのげるものが何もない。
「ど、どうしよう……このままじゃ寒さで……」

風邪をひく程度であれば良いが、夜の山はとても冷える。

体でも動かしておこうかと緋色は考えるが、それも難しそうだと結論付ける。

「今いる場所も、もしかしたら急に崩れてしまうかも……下手に動かない方がいいのかしら……」

足場は狭く、どれだけの強度があるかも分からない。

緋色はその場で膝を抱え、丸くなる。

寒さにぶると体を震わせた後、頭上を見上げる。

「薄っすらとだけど、上の方は見えている……。静かにしていれば朱音さまのご友人の足音も聞こえるかも……」

膝に顔を埋め、緋色は自分に言い聞かせる。

音をたてなければ獣にも見つかりにくい。寒さだけではどうしようもないが、緋色が帰ってこないことに気づいた朱音が探しに来てくれるかもしれないと僅かな希望を抱

きつつ、緋色は寒さに身を縮こまらせながらひたすら時間が過ぎるのを待った。

こつ、こつ、と何かが頭を小突いているような、そんな優しい刺激を受けて、緋色
は心地良い微睡みからハッと目を覚ました。

「——っ！」

ガバリと起き上がった緋色は、自分を起こした正体を見て驚きに目を見開く。

それと同時に、緋色の顔色は真っ青になった。

それもそのはず。

緋色の目の前には、ふさふさの毛を風に揺らしながら緋色の顔を間近で覗き込んで
いる、鋭く大きな瞳があった。

「……っ!？」

ひゅつと息を呑む。

緋色の目の前にいたのは、大きな体躯の狼だったのだ。

大きな瞳でじつと緋色を見つめ、ふすふすと鼻を鳴らし、湿った鼻で緋色の頬をつ
んと突いている。

大きな口で緋色の頭などかぶりと一口で噛み砕けるはずなのに、狼からは敵意を全
く感じない。それどころか反対に緋色の身を案じているような気配すら感じ取れて、

緋色は恐る恐る狼に視線を合わせた。

くると小さく鳴いた狼が緋色の頬をひと舐めしてから、すくっとその場で立ち上がる。

「……っ！ まさか、助けてくれた、の……？」

狼が緋色の側から離れた瞬間、冷たい風が緋色の体を撫でる。

緋色は自分が眠っている間、目の前の狼がすぐ側で体温を失わないようぴたりと身を寄せていてくれたことを悟った。

緋色の言葉に応えるように狼が一声鳴き、くると踵を返して素早くその場から立ち去る。

狼が側にいてくれなければ、体温を失って最悪の場合、緋色は命を落としていたかもしれない。

そのことを正しく理解した緋色は狼が去った崖上を仰ぎ見て、そこではっとする。「空が、明るくなり始めてる……！」

空が白んできている。

風は冷たいが、緋色の体にはまだ狼の温もりが残っている。

「崖上に、戻らなくちゃ……」

緋色はその場で立ち上がり、どうにかして保管庫に向かうことにした。

もとの小道に戻って道なき道を歩きながら、緋色は朱音が言っていたことを思い出す。

「朱音様はお友達が来るかもと言っていたけれど……結局いらっしやらなかったのかしら？ それとも、私が寝てしまっている間に保管庫に？」

そうするとすれ違ったことになる。

「それだけならまだしも……朱音様に頼まれた神招舞に使う道具が保管庫にまだあるのをご友人が見たのであれば……朱音様の頼みを遂行でできなかったと里の皆に知られてしまう……」

そうなればまた色々と言われ、叱責される。

緋色はずんと沈む気持ちを何とか奮い立たせながら道を歩く。

方向的には合っているはずだから、そろそろ保管庫が見えてくるにちがいない。そんなことを考えながら緋色が周辺を注視していた。

「——あっ！ ……えっ、嘘、でしょう……？」

保管庫の屋根が下から見えたと思んだのも束の間。

保管庫があった少しだけ開けていた場所は、昨夜崩れた土砂で覆われていた。

建物は右側半分だけを残して倒壊しており、倒壊した壁や中に入っていた諸々は土

砂と一緒に流されてしまったらしい。

「あ……どうしよう……」

緋色は真っ青になって小さく震える。

保管庫は里の皆が利用している場所。

その保管庫が、自然災害とはいえ自分がやって来たせいで壊れ、保管庫の中身もなくなったと里の者達が知れば……

緋色はどうしよう、どうしようと涙目になりながら周辺を見回す。

何かひとつでも保管庫の中身を回収できないだろうか、周囲を探っていると、緋色のいる場所から少し下ったところに、細い溪流があるのを見つけた。

そして、水の中にきらり、と光る物があるのを見て、緋色は目を輝かせた。

——あれはもしかして、朱音様に頼まれていた道具かもしれない。

迷いなく進む緋色の目指す溪流は、かくりよの里の結界の外だった。

緋色は逸る気持ちを抑えきれず、思わず駆け出した。山道を駆け下り溪流に踏み入れると、水がぱしゃりと足元で跳ねた。



時は緋色が土砂崩れに遭った、その瞬間まで遡る。

かくりよの里で緋色に「お願い」をした朱音は籐原を歓迎する夜の宴に加わり、彼の隣で酒を注いでいた。

その時——

——リンッ

「——っ！」

「どうした？」

「な、なんでもございせんわ、籐原様。少しだけ席を外します……」

朱音は籐原に声をかけ、そそくさとその場を後にする。

部屋を出て、廊下を歩く朱音は自分の口角が上がり、自然と表情が緩むのを止められない。

「術が発動したっ！ あ、の無能な名無しが、巻・き・込・ま・れ・た！」

朱音は思わず踊り出しそうなほど、高揚する気持ちを抑えきれずに笑い声が漏れてしまう。

下卑た笑い声を漏らしながら、朱音は気持ちを落ち着かせる為に近場の部屋に入った。

朱音が出て行った部屋の襖を簾原は険しい表情で見詰め続ける。

「何か、術を使ったのか」

朱音の僅かな霊力の揺れを感じたが、それも一瞬。

簾原は気のせいだろうかとか気を取り直し、話しかけてくる里長を適当にあしらいながら考える。

（明日も、明後日も……里祭りが開催されている間はこれがずっと続くのか？ まったくつまらん。冗談じゃない。さっさと相手を見繕って帝都に戻るか——）

だが、と簾原は一瞬考えたが、すぐに否とかぶりをふる。

里長に紹介されたのは、先程までここにいた門真朱音。

（あれくらいの霊力では無理だ。それに帝都でやっていけるかどうかの少ない霊力だな）

里一番の霊力を持つと紹介されたが、簾原が期待していたほどの霊力を持つ女性ではなかった。

（かくりよの里は外界と遮断しているせいで、自分達の里の力が弱まっていることに気づけていない）

簾原は自分に話しかけている里長をそのままに、その場を立った。

「簾原様？ どちらへ？」

「休ませてもらう」

「お、お待ちを！ 寝所まで朱音に案内を——」

「結構だ。場所は把握している」

朱音がいらない今、さっさとこの場を退出するに限る。

簾原はこの里に来てからべたべたと自分に纏わりつき、触れようとしてくる朱音に辟易していた。

里長がいまだに背後で何か喋っているが、簾原は自分呼び止める声を無視して宴会場を後にした。

簾原が静まり返る廊下を歩いていると、ふっと自分の隣に気配が落ちた。

「尋様」

「——芙蓉か。どうした？」

音もなく現れた白髪の男に簾原——尋、は驚いた様子もなく淡々と言葉を返す。

「気にされていたあの場所に行かれるのですか？」

「——ああ。里の外れの場所か。いや、今日はもう遅い。明日、陽が昇ってから確認しに行く」

「御意に」

尋の返事を聞いて芙蓉は頷いた後、その場から音もなく消える。

廊下を歩き、自分の部屋に向かいながら尋は考える。

（あの霊力、物か何かに宿っていると思ったが……たしかにあの時目が合った。あそこにあったのは人間、だ——。そして恐らく、年若い女性）

里一番の霊力を持つのは朱音だと里長が紹介した理由は何なのだろうか。

朱音とは比べ物にならないほどの霊力を持つというのに、里祭りの間中、あの霊力の持ち主は里の中心には全く現れない。

何かあるなと考えつつ、部屋に到着した尋はそのまま入室する。

気疲れもあるのだろう。用意されていた布団に横になるなり、尋は眠りについた。

尋が布団に入ってどれくらい時間が経っただろうか。

尋は突然目を覚まし、飛び起きる。

「芙蓉！」

叫ぶように部下の名前を口にした尋に、すぐに声が返った。

「——ここに！」

尋のただならぬ様子に、慌てて芙蓉が姿を現す。

尋は部屋の中で、とある方向に目を向けたまま、硬い声で芙蓉に告げた。

「かくりよの里の結界外に里の人間が出てしまったようだ。妖魔が迫っている。先に

行け！」

「御意に！」

尋に応えるやいなや、芙蓉は再び一瞬で姿を消した。

一点を見つめていた尋の瞳は、青く輝いている。

さらさらと輝く青は、暗い室内でも美しさを損なわず畏れすら抱かせる。

ふるりと頭を振ってからその場で立ち上がる。

今はまだ夜が明け、外は白み始めたばかりだ。

尋は瞳を青く輝かせたまま手早く外着に着替え、駆け出した。



場所は変わり、緋色は崖崩れで崩壊した保管庫の近くの溪流に降りていた。

緋色は川を漂う紙のような物を、ざぶりと川から掬い出した。

「滲んで見えないけど、保管庫にあった物、よね……。集めて戻さなきゃ……」

きつと酷く叱られてしまっだろうと、緋色はこれからおとずれるだろう恐怖に氣を取られていた。

そのため自分が結界の外に出てしまっていることに、未だ気づいていない。

ばしゃばしゃと川の水を跳ねさせながら、水中から保管庫にあったと思われる物を拾い集め、懐に入れていく。

そんな緋色の後ろ姿を、遠くからじいっと見つめる人ならざるものの存在があった。黒い靄のようなものがゆらゆらと揺れていて、姿ははつきりと形成されていない。けれど、ぎょろりと大きい目が見開いており、血のように真っ赤な瞳は緋色を真っ直ぐ射貫いている。

靄のような部分がぱつくりと横に割れ、割れた中は禍々しいほどの闇色。その闇色が奥の奥、奥深くでうごうごと蠢いているように見える。

大きく割れたそこからは何か液体のような物が滴り落ち、その様はまるで餌を前にした動物のようで――

《――!!》

うごめくその人ならざる物は、酷く濁った音を発して物凄い速度で緋色に向かって突っ込んだ。

「え? ……ひっ!」

悍ましい音に気づいた緋色は、慌ててそちらを振り向き、瞬く間に顔色を真っ青にした。

得体の知れない、真っ黒い物がとてつもない速度で緋色に迫っていた。

緋色は慌てて川から上がろうとしたが、川から上がり、結界に戻るよりもその黒い物体が緋色に追い付く方が確実に早い。

黒い物体は、緋色に近づくにつれて輪郭がぼやけ、黒い霧状のような物に変わり、最後は煙のような、うごうごと蠢く靄に変化した。

一心不乱に川を進む緋色だったが、黒い靄は緋色のすぐ背後まで迫ってきている。悍ましい気配をすぐ後ろに感じた緋色が絶望の表情を浮かべた瞬間――

突如、大きなナニカが緋色と黒い靄との間に現れた。背中を押されて川に尻餅をついてしまふ。

お尻を川に浸らせ、緋色は目の前にいるナニカの姿に驚愕して目を見開いた。

「しろ、蛇……?」

緋色の目の前にいるのは、巨大な白蛇と先程の黒い靄。

白蛇はばしゃばしゃと尻尾で水面を荒々しく叩きながら、黒い靄に向かっていく。白蛇の動きは緋色を庇い、助けているように見える。

信じられない光景に緋色が絶句していると、白蛇が長い首をもたげて緋色を見た。《結界内に戻れ!》

「……っ!?」

キンッ、と直接頭に響くような男の声に、緋色は思わず耳を塞ぐ。
だが、その「声」が発した言葉の意味にハッとして、緋色は山を振り返る。
そうだ、結界内に戻れば、黒い霧もそれ以上は追ってくることはできない。

「……っ！」

それに気づいた瞬間、緋色は川から腰を上げて水に足を取られながら駆け出した。
ばしゃばしゃと川の水を跳ね、川から上がって砂利道を駆ける。

黒い霧と白蛇が戦っているのだろう。背後からは戦闘の音が聞こえてくる。

どしゃ、と何かが落ちたような大きな音が聞こえた。

緋色は喉をひりつかせ、喘ぎながら結界の内側——山中に向かって駆け続ける。

どれだけ足を前に動かしても、ぐいぐいと背後から急速に近づいてくる気配を感じる。

先程の大きな音は、緋色を助けてくれた白蛇が川に倒れた音かもしれない。もしそうだとしたら、背後から急速に近づく気配は先程の黒い霧だということだ。

もはやここまでかと緋色が絶望し、涙を溢れさせた瞬間。

「——伏せろ！」

どこからか男の声が聞こえてきて、緋色は走りながら咄嗟に頭を屈める。

体勢を屈めた緋色の頭上から、空気を裂くような鋭い音が耳に届いた一瞬の後、悍

ましい叫び声上がる。

だが、緋色はその音を聞いても背後を確認する余裕がない。

「——っ！」

全力で走っていた緋色は体勢を崩し、前方に転びそうになった。

衝撃に備え、緋色が強く目を瞑った瞬間、真正面の「何か」にぼすつと当たる。

まるで大木みたいに、びくともしない何か。

だが大木のような無機質な物体ではなく、温もりを感じられる何か。

そして緋色は背中から抱き上げられ、正面からしっかりと抱き留められた。

「——っ！」

「芙蓉！ 殺せ！」

《承知しました！》

緋色を抱き留めたのは、間違いない人だ。伏せろ、と叫んだ声の主は男性だった。

緋色は男性に正面から強く抱き締められ、その間にもその男性は何度か腕を動かしている。

背後にいる人ならざる物からの攻撃を防いでいるのだろう。

芙蓉、と呼び、次いで殺せ、と命令した。目の前の男性は確実に身分のある人間にちがいない。

緋色を助け、川で人ならざる物と戦っていた白蛇は、目の前の男性の部下なのだろう。

それに、と緋色は考える。

（こんな所に、里の人が来るはずがない……っ、だとしたら目の前にいる男性と、白蛇さんは、里の外の人——！）

緋色がその考えに至ったその時。

《……っ！》

人ならざる物の断末魔が響く。

聞き取れないほどの耳障りな音が周囲に響き、緋色は咄嗟に目を瞑った。

「——おい、君。もう大丈夫だ」

恐ろしい断末魔から数秒。

緋色がぎゅうと強く目を瞑ったまましていると、柔らかな低い声がかかる。

「大丈夫だ」と言うように背中を軽く叩かれ、緋色は自分の体勢を思い出してはっと目を見開いた。

「た、大変申し訳ございません！」

抱き締められていたことを思い出し、緋色は真っ青になって慌てて目の前の男から

離れる。

「助けて頂いたのに、すぐにお礼も言えず大変失礼いたしました……！」

「いや、危ないところだった。間に合ってよかった」

緋色は頭を下げたまま、自分の失態で、里に来た外の人間を危険に晒してしまったことを強く悔いていた。

（どうしよう、里の人に酷く怒られてしまう——！）

緋色はぶわりと涙を目に溜める。

目の前の男性にどうお詫びをすればいいか、それから里長への説明、それに朱音にどうやって謝罪をすれば良いだろうか、様々なことに頭をぐるぐると混乱させていると、頭上から再び柔らかな声が降り注いだ。

「ああ、やはり。あの夜に建物の中にいたのは君だったか」

「え？」

自分を知っているような口振りに緋色は頭を上げ、男の顔を見る。

あの夜、とは。

里の人間以外と「目が合った」と感じたのは一人しかない。

「あの時、の……青い瞳をした方があなただったのですね……」

美しいと感じたあの男。彼の名は——藤原尋。

緋色の言葉に、尋は一瞬息を呑んだ。が、次の瞬間背後から声をかけられる。「尋様。先程の妖魔のご報告はどうなさいますか？」

「——そう、だな。考えよう」

一瞬言葉を失うも、尋はなんとかそれだけを答えた。

それから。

緋色は尋の上着を借り、溪流の近くにあった大きな岩に腰掛けていた。

緋色と尋は少しだけ会話をしたが、尋はすぐに白蛇の芙蓉と、妖魔の処理に行ってしまった。

緋色を助けてくれた白蛇は、やはり尋の部下だった。白蛇の姿を解いた芙蓉は自分の名を名乗り、白蛇の妖怪であることを教えてくれた。

芙蓉は緋色に軽く自己紹介をした後、尋の下に向かったところだ。未だ緋色は里の結界の外側にいるのだが、不思議と妖魔の気配は感じられない。

緋色は、妖魔が消滅した付近で何やら話をしている尋と芙蓉をぼうつと見つめていた。

（……どうしてこんな時間にこんな所にいたのかって聞かれるわよね。里以外の人に説明しても大丈夫かしら……。でも、あの方達は危険を顧みず助けてくださったのだ

し……。それに……）

先程から尋と芙蓉は黒い霧のことを「妖魔」と呼んでいる。

妖怪でも、魔物でもない。

妖魔は妖怪や魔物よりも力が強く、知恵もある。

そんな妖魔をあつさりと倒したあの二人は、一体何者なのだろうかと緋色が考えていると、話が終わったのだろう。尋と芙蓉が緋色に向かって歩いて来るのが見えた。

緋色は慌てて岩から降り、二人を待つ。

「立っていて大丈夫か？ 足が擦り傷だらけだ、無理して立たなくていい」

尋が緋色に声をかける。

「あ、ありがとうございます……！ ですが、外からやって来たお二人は里のお客様ですし……それに」

緋色はちらり、と尋を見てから口を開く。

「朱音様が貴方様に敬語を使い、敬っておりますのでとても高貴な方だと……」

「そんな大層な人間じゃない。畏まらないでくれ。それより、君はなぜこんな時間に、こんな場所にいた？」

聞かれるとは思っていたが、実際尋にそう聞かれて緋色はどう説明すれば良いかと瞳を揺らす。

緋色は神招舞の道具を取るためにここまで来た。

だが、それを里の人間以外に話して大丈夫だろうかと考えて、詳細は伏せて説明しようという考えに至った。

（助けてくださった方達に、嘘はつけないもの……）

緋色はなぜこの場所にやって来たのか、それからどうして溪流にいたのかを簡単に説明する。

すると、緋色の説明を聞いた尋はぎょつと目を見開いた。

「昨夜からこの山にいた……!? 夜を明かしたのか!? 真夜中は相当な寒さだっただろう!?」

「そ、それが不思議なことに野生動物が側にいて、暖を取れたので大丈夫だったのです」

「——野生動物？ だが、人間が暖を取れるほどの大きさの動物は冬眠しているだろう？ それに大きな野生動物は危険だ。君が無事だったのは奇跡だ。それに土砂崩れ？ 雨も降っておらず、地盤がしつかりしたこの場所で？」

尋は緋色の説明を聞いて腑に落ちないという様子で顎に手を当てる。

不審がらせてしまった、どうしようも緋色が狼狽していると、芙蓉がすすと尋に近づきこそりと耳打ちした。

「尋様。そちらの女性が落ちてしまったと言った方角から僅かに霊力が……」

「ああ。分かっている。あの女の霊力が残っているな」

芙蓉の言葉に尋も頷く。

（この女性が言う土砂崩れとは……恐らくあの朱音とかいう女が引き起こしたものでしょう。あの女は私がこの女性と接触することを止めたいようだった。だが、これだけの霊力を持つ女性なのに、なぜ？）

緋色の姿を見てみれば、里の人間が着ている着物よりも古びていて、所々自分で繕っているような部分も見受けられる。

そして、目の前の緋色は里で見てきたどの大人よりも小さく、細い――

尋は緋色の里での境遇を察して、不快感に眉を顰めた。

「とりあえず里に戻ろう。君の怪我の手当もしなければ」

尋の言葉を聞いた緋色は顔面蒼白になり、勢いよく尋に向き直った。

「だ、大丈夫です……！ 家で、手当をします！ お客様はお邸に戻ってください！」

緋色の突然の剣幕に、尋は更に眉を顰め「なぜ」と問う。

「どうして君は、先程からそんなに怯えているんだ。もう妖魔も、近くには害を成す妖怪もいない。それなのに君が怯えるのは……」

尋は考える素振りを見せたが、それも束の間。

立ち読みサンプル
はここまで

ずっと目を細めて硬い声音で緋色に問う。

「里が原因か？」

尋の言葉を聞き、緋色があからさまに肩を跳ねさせる。

「――君は俺の邸で手当する。いいな？」

否と言わせない、強い口調で尋は言い放った。

緋色は、少し力を加えれば折れてしまいそうなほど痩せ細っている。こんなにもか弱い女性を、この里の人間はどうして虐げているのだと、尋は憤りを感じた。

里の結界の内側に戻った尋と芙蓉、緋色の一行は、山中を進んで里に戻る。

緋色は自分で歩こうとしたが、その傷で山道を歩くつもりかと尋に叱られ、芙蓉に背負ってもらっていた。

最初は断っていた緋色であったが、移動速度を考え、早く里に戻るためだと言われてしまえば領く他ない。

里の客人になんてことをさせているのだろうかと思えば緋色が項垂れていると、隣を歩く尋に尋ねられた。

「そういえば、君の名前を聞いていなかったな。話をしにくい。名前を教えてください」
「……」

名前。

いつかは聞かれてしまうと思っていた。

芙蓉の肩を掴んでいた緋色の手のひらに、不自然に力が籠る。

緋色の反応に、芙蓉は心配するように緋色を見た。

「名前……」

「ああ。名前が分からないと呼びにくい」

至極当然といった尋の態度に、緋色は言葉を詰まらせる。

そうしているうちに、尋は「あ」と声を漏らして緋色に顔を向けた。

「すまない、礼を欠いた。まずは先に名乗るべきだった」

緋色を安心させるように目を細め、優しく微笑んだ尋は言葉を続ける。

「俺は籐原尋。気軽に籐原と呼んでくれ」

「……」

名乗られれば、緋色も自らの名を明かさねば礼を欠く行為となる。

（な、名前……）

緋色は、「名無し」となった七歳の頃から、自分に付けられた名前を一切呼ばれていなかった。

子供の頃から霊力を感じなかったとはいえ、七歳までは一応両親から名前を呼ばれ